

# 光籃

泉鏡花

青空文庫



田舎いなかの娘であらう。縞柄しまがらも分らない筒袖つつっぽの古浴衣ふるゆかたに、煮染にしめたやうな手拭てぬぐいを頬ほ被りおかぶして、水の中に立つたのは。……それを其そのまゝに見えるけれど、如何いかに奇きを好めばと云つても、女の形に案山子かかしこしらを拵こしらへるものはない。

盂蘭盆うらぼんすぎの良い月であつた。風はないが、白露しらつゆの蘆あしに満ちたのが、穂ほに似て、細せせら流ぎに揺れて、雫しずくが、青い葉、青い茎つたわを伝つて、点滴したたるばかりである。

町を流るゝ大川おおかわの、下の小橋こはしを、もつと此処ここは下流かたに成る。やがて瀾かたへ落ちる川口かわぐちで、此この田つゞきの小流こながれとの間あいだには、一寸ちよつと高く築きずいた塘堤どてがあるが、初夜しよや過ぎて町は遠し、村も静しずまつた。場末の湿地で、藁屋わらやの佐わびしい処ところだから、塘堤一杯の月影も、破窓やれまどをさす貧ますしい台所の棚の明おもむきい趣きがある。

遠近おちこちの森に棲すむ、狐きつねか狸たぬきか、と見るのが相応ふさわしいまで、ものさびて、のそくと歩行あるく犬さへ、梁はりを走る古鼠ふるねずみかと疑はるゝのに――

ぎぶり、

ぎぶり、

ぎぶく、

ぎあ――

ぎぶり、

ぎぶり、

ぎぶく、

ぎあ――

小豆あずきあらひと云ふ変化へんげを想はせる。……夜中に洗濯の音を立てるのは、小流こながれに浸つた、

案山子同様の其の娘だ。……

霧の這ふ田川の水を、ほの白い、箆で掻きく、泡沫を薄青く掬ひ取つては、細帯につけた畚の中へ、ト腰を捻り状に、ざあと、光に照らして移し込む。

ざぶり、　　ざぶり、　　ざぶく、　　ざあ――

おなじ事を繰返す。腰の影は蘆の葉に浮いて、さながら黒く踊るかと思えた。

町の方から、がやくと、婦まじりの四五人の声が、浮いた跫音とともに塘堤をつたつて、風の留つた影燈籠のやうに近づいて、

「何だ、何だ。」

「あゝ、行つてるなあ。」

と、なぞへに蘆の上から、下のその小流を見て、一同に立留つた。

「うまく行るぜ。」

「真似をする処は、狐か、狸だらうぜ。それ、お前によく似て居らあ。」

「可厭。」

と甘たれた声を揚げて、男に摺寄つたのは少い女で。

「獺だんべい、水の中ぢや。」

と、いまの若いのの声に浮かれた調子で、面を渋黒くニヤ〜と笑つて、あとに立つたのが、のそ〜と出たのは、一挺の艦と、かんでらをぶら下げた年倍な船頭である。此の唯一つの灯が、四五人の真中へ入つたら、影燈籠は、再び月下に、其のま〜くる〜と廻るであらう。

ざぶり、

ざぶり、

ざぶ〜、

ざあ——

髪を当世にした、濃い白粉の大柄の年増が、

「おい、姉さん。」

と、肩幅広く、塘堤ぶちへ頭はれた。立女形が出たから、心得たのであらう、船頭め、かんでらの灯を、其の胸のあたりへ突出した。首抜の浴衣に、浅葱と紺の石松の伊達巻ばかり、寝衣のなりで来たらしい。恁う照されると、眉毛は濃く、顔は大い。此処から余り遠くない、場末の某座に五日間の興行に大当りを取つた、安来節座中の女太夫である。

あとも一座で。……今夜、五日目の大入を刎ねたあとを、涼みながら船を八葉漕へ浮べようとして出て来たのだが、しこみものの鮎、煮染、罫づめの酒で月を見るより、心太か安いアイスクリームで、蚊帳で寝た方がいゝ、あとの女たちや、雑用宿を宿

場へ浮れ出す他の男どもは誰も来ない。また来ない方の人数が多かつた。

「おい、お前さん。」

と、太夫の年増は、つゞけて鷹揚に、娘を呼んだ。

流の案山子は、……ざぶりと、手を留めた。が、少しは気取りでもする事か、棒杭に引かゝつた菜葉の如く、たくしあげた裾の上へ、据腰に箆を構へて、頬被りの面を向けた。目鼻立は美しい。で、濡れくとして艶ある脛は、蘆間に眠る白鷺のやうに霧を分けて白く長かつた。

「感心——なか／＼うまいがね、少し手が違つてるよ。……さん子さん、一寸唄つてお遣り。村方で真似をするのに、いゝ手本だ。……まうけさして貰つた札心に、ちゃんとした処を教へてあげよう。置土産さ、さん子さん、お唄ひよ。」

「可厭、獺に。……気味が悪いわ、口うつしに成るぢやないの。」  
と少いのが首とともに肩を振る。

「獺に教へれば、芸の威光さ。ぢやあ、私が唄ひながら。——可いかい、——安来千軒名の出た処……」

もう尤も微酔機嫌で、

「さあ、遣つて御覧よ。……鱒どじょうすくひさ。」

「ほゝゝ。」

と娘は唯ただ笑つた。

月にも、霧にも、流ながれの音にも、一座の声は、果敢はかなき蛾ひとりむしのやうに、ちらくくと乱るゝの  
に、娘の笑わらい声こえのみ、水に沈んで、月影の森に遠く響いた。

「一寸ちよつと、お遣りつたら。」

「ほゝゝ。」

「笑つてないでさ、可いいかい。——鱒どじょうすくひの骨髓ところと言ふ処ところを教へるからよ。」

「あれ、私はな、鱒どじょうすくふのでござんせぬ。」

「おや、何なにをしてるんだね。」

「お月様の影かげを掬すくひますの。」

と空を仰いで言つた。蘆あしの葉はの露つゆは輝いたのである。

「月影を……」

「あはゝ、などと言つて、此奴こいつ、色男いろおとこと共稼ともくぎに汚穢おわいと取りの稽古けいこで居ゐやがる。」  
と色の黒い小男こおとこが笑わらい出すと、角面かくづらの薄化粧うすけいざうした座長ざちやう、でつぶりした男おとこが、

「月を汲んで何にするんだ。」

「はあ、暗の夜の用心になあ。」

此奴は薄馬鹿だと思つたさうである。後での話だが——些と狐が憑いて居るとも思つたさうで。……そのいづれにせよ、此の容色なら、肉の白さだけでも、客は引ける。金まうくと、座長の角面はさつそくに思慮した。且つ誘拐ふに術は要らない。

「分つたく、えらいよお前は——暗夜の用心に月の光を掬つて置くと、策の目から、ざあく洩ると、畚から、ぽたく流れると、ついでに愛嬌はこぼれると、な。……此の位世の中に理窟の分つた事はねえ。感心だ。——処でな、おい、姉え。おなじ月影を汲むなら、そんなぢよろしく水でなしに、瀉へ出て、そら、ほつと霧のかゝつた、あの、其処の山ほど大きく汲みな。一所に來な、連れて行くぜ。」

女太夫に目くばせしながら、

「俺たちは、その月を見に瀉へ出るんだ。——一所に來なよ、御馳走も、うんとあらあ。」  
「ほう、来るかく、猫よりもおとなしい。いまのまに出世をするぜ、いゝ娘だ、いゝ娘だ。」

と黒い小男が囁した。

娘は、もう蘆あしを分けて出たのである。露つゆにしつとりと萎しなへた姿も、水には濡ぬれて居なかつた。

すぐ川かわ堤づつみを、十歩とあしばかり戻り気味に、下へ、大川おおかわへ下口おりくちがあつて、船着ふなつきに成つて居る。時に三艘さんぞうばかり流ながれに並んで、岸の猫柳ねこやなぎに浮いて居た。

(三さん界がい万まん霊りょう、諸行しよぎやう無常むじやう。)

鼠ねずみにぼやけた白い旗はたかが、もやひに搦からんで、ひよろ／＼と漾ただよふのが見えた。

「おや／＼、塔婆とうばも一本、流れ灌頂かんちやうと云ふ奴だ。……大変なものに乗せるんだな。」  
座長ざちやうが真まさきにのりかゝつて、ぎよつとした。三艘さんぞうのうちの、一番大形おおがたに見える真

中の船ふなであつた。

が、船ふなべりを舐なめて這はふやうに、船頭ふねがしらがかんてらを入れたのは、端はなの方はたの古船ふるふねで。

「旦那だんな、此方こちだよ。……へい、其それは流れ灌頂かんちやうではござりませぬえ。昨日きのう、盂蘭盆うらぼんで川かわ施餓せが

鬼がきがござりましたでや。」

「流れ灌頂かんちやうと兄弟分あなだ。」

「可厭いやだわねえ。」

「一蓮托生いちれんたくしやうと、さあ、皆乗みんなつたか。」

と座長が捌く。

「小父さん、船幽霊は出ないこと。」

と若い女が、ぢやぶく、ぢやぶくと乗出す中に、怯えた声する。

兀げたのだらう。月に青道心のやうで、さつきから黙り家の老人が、

「船幽霊は大海のものだ。濁にはねえなあ。」

「あれば生擒つて銭儲けた。」

ぎい、ちよん、ぎい、ちよんと、堤の草に蟋蟀の紛れて鳴くのが、やがて分れて、

大川に唯艫の音のみ、ぎい、と響く。ぎよ、ぎよと鳴くのは五位鷺だらう。

「なむあみだぶつ。あゝ、いゝ月だ。」

と寂しく掉つた、青道心の爺の頭は、ぶくりと白茄子が浮いたやうで、川幅は左右へ展

け、船は霧に包まれた。

「変な、月のほめやうだな、はゝゝ。」

と座長は笑ひ消しつつ、

「おい、姉や、何うした。」

と言ふ。水しやくひの娘は、剥いた玉子を包みあへぬ、あせた緋金巾を搔合せて、

鵜が赤い魚を銜へたやうに、舳にとぼんと留つて薄黒い。通例だと卑下をしても、あとから乗つて舳の方にあるべき筈を、勝手を知つた土地のもの所の為だらう。出しなに、川施餓鬼で迷つた時、船頭が入れたかんでらの火より前に乗つて、舳にちよこなんと控へたのであつた。

実は、これは心すべき事だつた。……船につくあやかしは、魔の影も、鬼火も、燃ゆる燐も、可恐き星の光も、皆、ものの尖端へ来て掛るのが例だと言ふから。

やがて、其の験がある。

時に、さすがに、娘氣の慇懃心か、あらためて呼ばれたので、頬被りした手拭を取つて、俯むいた。

「あら、きれい。」

「まあ、光るわねえ。」

安来ぶしの婦は、驚駭の声を合せた。

「一寸、何、其の簪は。」

銀杏返もぐしやくくに、掴んで束ねた黒髪に、琴柱形して、晃々と猶ほ月光に照映へる。

「お見せ。」……とも言はず、女太夫が、間近から手を伸すと、逆らふ状もなく、頬を横に、鬢を柔順に、膝の皿に手を置いて、

「ほゝゝゝ。」

と、薄馬鹿が馬鹿笑に笑つたのである。

年増は思はず、手を引いて、

「えゝ、何だねえ、気味の悪い。」

生暖い、腥い、いやに冷く、かび臭い風が、颯と渡ると、箕で溢すやうに月前に灰

汗が掛つた。

川は三つの瀬を一つに、どんよりと落合つて、八葉瀉の波は、なだらかながら、八つに打つ……星の洲を埋んだ銀河が流れて漂渺たる月界に入らんとする、恰も瀉へ出口の処で、その一陣の風に、曇ると見る間に、群りかさなる黒雲は、さながら裾のなき滝の虚空に漲るかど怪まれ、暗雲忽ち陰惨として、灰に血を交ぜた雨が飛んだ。

「船頭さんく。」

「お船頭々々。」

と青坊主は、異変を恐れて、船頭に敬意を表した。

「苦があるで。」

「や、苦どころかい。」

「あれ、降つて来た、降つて来た。」

声を聞いて、飛ぶ鷺を想つたやうに、浪の羽が高く煽る。

「着ける、着ける、早くつけてくれ。」

屋は潟魚の市も小さく立つ。——村の若い衆の遊び処へ、艦数三十とはなかつたから、船の難はなかつた。が、堤尻を駈上つて、掛茶屋を、やゝ念入りな、間近な一せんめし屋へ飛込んだ時は、此の十七日の月の氣勢も留めぬ、さながらの闇夜と成つて、篠つく雨に風が荒んだ。

侘しい電燈さへ、一点燭の影もない。

めし屋の亭主は、行燈とも、蠟燭とも言はず、真裸で慌て惑つて、

「お仏壇へ線香ぢや、線香ぢや。」

と、ふんどしを絞つて喚いた。

恚る田舎も、文明に馴れて、近頃は……余分には蠟燭の用意もないのである。

「……然うだ、姉え。恚う言ふ時だ、掬つた月影は何うしたい。」

と、座長の角面がつゞけ状に舌打をしながら言った。

「真個だわ。」

「まつたくさ。」

太夫たちも声を合せた。

不思議に、螢火の消えないやうに、小さな簪のほのめくのを、雨と風と、人と水の香と、入乱れた、真暗な土間に微に認めたのである。

「あゝ、うっかりして忘れて居ました。船へ置いて来た、取つて来ませう。」

「ついでに、重詰を願ひてえ。一升罌は攫つて来た。」

と黒男が、うは言のやうに言ふ間もあらせず、

「やあ、水が来た、波が来た。……薄馬鹿が水に乗つて来た。」

と青坊主がひよろくと爪立つて逃げあるく。

「お仏壇ぢや、お仏壇ぢや、お仏壇へ線香ぢや。」

「はい、取つて来ましたよ。」

と言ふ、娘の手にした畚を溢れて、湧く影は、青いさゝ蟹の群れて輝くばかりである。

「光を……月を……影を……今。」

と凜と言ふと、畚を取つて身構へた。向へる壁の煤も破れも、はや、ほの明るく映さるゝ、そのたゞ中へ、袂を払つてパツと投げた。間は一面に白く光つた、古、畳の目は一つ一つ針を植ゑたやうである。

「あれ。」

「可恐い、電。」

と女たちは、入りもやらず、土間から框へ、背、肩を橋にひれ伏した。

「ほゝゝ、可恐いの？」

娘は静に、其の壁に向つて立つと、指をしなやかに簪を取つた。照らす光明に正に視る、簪は小さな斧であつた。

斧を取つて、唯一面の光を、端から、丁と打ち、丁と削り、ことごとくと敲くと、その削りかけは、はらくと、光る柳の葉、輝く桂の実にこぼれて、畳にしき、土間に散り、はた且うつくしき工人の腰にまとひ、肩に乱れた。と見るゝ風に従つて、皆消えつつ、やがて、一輪、寸毫を違へざる十七日の月は、壁の面に掛つたのである。

残れる、其の柳、其の桂は、玉にて縫へる白銀の蓑の如く、腕の雪、白脛もあらはに長く、斧を片手に、掌にその月を捧げて立てる姿は、瀉も川も爪さきに捌く、銀河に紫

陽花の花籠を、かざして立てる女神であつた。

顧みて、

「ほゝゝ。」

微笑むと斉しく、姿は消えた。

壁の裏が行方であらう。その破目に、十七日の月は西に傾いたが、夜深く照りまさつて、拭ふべき霧もかけず、雨も風もあともない。

這へる蔦の白露が浮いて、村遠き森が沈んだ。

皎々として、夏も覚えぬ。夜ふけのつゝみを、一行は舟を捨てて、鯨と、鰯とが、寺詣をする状に、しよぼくと辿つて歸つた。

ざぶり、

ざぶり、

ざぶく、

ざあ――

ざぶり、

ざぶり、

ざぶく、

ざあ――

「しいッ。」

「此処だ……」

「先刻の処。」

と、声の下で、囁きつれると、船頭が真先に、続いて青坊主が四つに這つたのである。

——後に、一座の女たち——八人居た——楽屋一同、揃つて、刃を磨いた斧の簪をさした。が、夜寝ると、油、白粉の淵に、藻の乱るゝ如く、黒髪を散らして七転八倒する。

「痛い。」

「痛い。」

「苦しい。」

「痛いよう。」

「苦しい。」

唯一人……脛すらりと、色白く、面長な、目の涼しい、年紀十九で、唄もふしも何にも出来ない、総踊りの時、半裸体に蓑をつけて、櫂をついてまはるばかりのあはれな娘のみ、斧を簪して仔細ない。髪にきらりと輝くきれいさ。



# 青空文庫情報

底本：「日本幻想文学集成1 泉鏡花」国書刊行会

1991（平成3）年3月25日初版第1刷発行

1995（平成7）年10月9日初版第5刷発行

底本の親本：「泉鏡花全集」岩波書店

1940（昭和15）年発行

初出：「苦楽」

1924（大正13）年5月

※ルビは新仮名とする底本の扱いにそって、ルビの拗音、促音は小書きしました。

※初出時の表題は「鱒すくひ」です。

入力：門田裕志

校正：川山隆

2009年5月10日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 光籃 泉鏡花

2020年 7月18日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>